ジェンダーと科学

水島 希

私が勤めている総研大「科学と社会」分野では，科学技術と社会について教える際，科学哲学（倫理を含む），科学史，（他の）科学技術社会論の三部構成を取っている。「ジェンダーと科学」は幅広いトピックを含む領域だが，今日はこの構成に沿って5冊を紹介したい。特に，今年出版された新刊を中心に取り上げる。

そもそもジェンダーとは何だろうか。社会的に作られた女らしさ・男らしさを指し，生物学的な性＝セックスとは区別される，と習った人は多いだろう。性差のどこまでが生物学的に決まったもので，どこからが環境や文化の影響によるのかという議論は長く続いている。しかし，生物学的な性（セックス）自体がすでに多様なのだということはあまり意識されていない。生物学者でフェミニズム科学批評家でもあるアン・ファウスト-スターリングの『**セックス／ジェンダー――性分化をとらえ直す**』は，生物学とセックス，ジェンダーの入り組んだ関係を解説した入門書だ。新生児は，染色体・精巣や卵巣・そこから放出される性ホルモン・それらによって形成される外性器，といった多階層の多様なセックスを持って生まれる。しかし出生後，性器の形状から「女」か「男」に分類される。性は二型である（はずだ）という生物学や医学の中にある固定観念が，現実のセックスの多様性を覆い隠し，さらにはジェンダーや性的指向の多様さ，可変性までも否定していくのだ。

科学技術とフェミニズムの融合領域における探究は，こうした生物学や医学が規定する「人間とはなにか」「自然とはなにか」といった概念に揺さぶりをかけてきた。この領域の著作をもう1冊紹介しよう。「サイボーグ宣言」で人間存在をテクノロジーを含んだものに拡張したダナ・ハラウェイが，『**犬と人が出会うとき――異種協働のポリティクス**』では生物種の境界を越える。犬など身近な動物だけでなく，腸内細菌といった我々の体内外に大量に存在する微生物を考慮に入れれば，人間と人間以外を隔てる明確なラインは存在しない。感染，共生，生殖といった様々なコンタクトゾーンの中で我々は誰と／何と生きているのかを改めて考えさせられる著作だ。

続いて歴史分野から。隠岐さや香『**文系と理系はなぜ分かれたのか**』は，西欧の学術アカデミー黎明期や日本の近代化の過程まで遡り，学問がどのように編成されてきたかを探る本だ。第4章「ジェンダーと文系・理系」では，進路選択のジェンダー差と，いわゆる「理工系」分野に女性が少ないことをめぐる論点がもれなく簡潔にまとめられている。前章までの経緯を見れば，男性官僚中心の制度設計の中では「非

セックス／ジェンダー 性分化をとらえ直す
アン・ファウスト-スターリング 著
福富護／上瀬由美子／宇井美代子／立脇洋介／西山千恵子／関口元子 訳
四六判　2200円　世織書房　2018年

犬と人が出会うとき
異種協働のポリティクス
ダナ・ハラウェイ 著　高橋さきの 訳
四六判　3600円
青土社　2013年

文系と理系はなぜ分かれたのか
隠岐さや香 著
新書判　980円
星海社　2018年

男性」の学術的興味は周縁に追いやられたであろうことが容易に想像できるが，問題は学問区分だけにとどまらない。ジェンダーによる職務分離は，科学技術への非男性の進出を阻んでいる。たとえば伝統的に男性が多い職場では，女性的な振る舞いは見下され，男性と同じにすれば反発を買う。隠岐氏が「無理ゲー」と評する板挟みな職場環境で，女性科学者が研究室運営をうまく取り仕切り出世するのは至難の業だ。

これは技術職にも当てはまる。石井香江『**電話交換手はなぜ「女の仕事」になったのか――技術とジェンダーの日独比較社会史**』は，IT産業のはしりである電信・電話産業の黎明期における性別職務区分の形成過程を追った研究書だ。電信業務（技術職）が男性化し，電話交換業務（事務職）が女性化する経緯が，社会的な性役割の変化や，性規範などを通した女性身体の統治という視点から丁寧に描かれている。欧米では蓄積のあるテーマだが，日本の事例研究は少なく貴重だ。

身体をめぐる問題は「ジェンダー科学」の中でも大きな課題の1つだ。最後に，昨年から大きなニュースとなっている強制不妊の事例を紹介する。優生手術に対する謝罪を求める会（編）『**〔増補新装版〕優生保護法が犯した罪――子どもをもつことを奪われた人々の証言**』は，戦後すぐに制定された優生保護法（現母体保護法）による強制的不妊手術の実態を明らかにした書籍だ。当事者の証言，優生政策の歴史分析から，医学がどのように優生政策を正当化したかが示されている。近年では新型出生前診断や受精卵のゲノム編集といった科学技術が，新たな優生学と呼ばれる動きを促進している。フェミニズム科学批評やジェンダーを軸とした科学技術史とともに，現在進行形の問題をとらえるため，ぜひ多くの方に読んでほしい。

（みずしま・のぞみ：総合研究大学院大学）

電話交換手はなぜ「女の仕事」になったのか
技術とジェンダーの日独比較社会史
石井香江 著
A5判　6500円
ミネルヴァ書房　2018年

〔増補新装版〕優生保護法が犯した罪
子どもをもつことを奪われた人々の証言
優生手術に対する謝罪を求める会 編
四六判　2800円
現代書館　2018年

地球とヒトの行く末

渡辺政隆

日本では2年前に訳書が出版された世界的なベストセラー，ユヴァル・ノア・ハラリの『サピエンス全史』は，人類史の見方を変えた。それまで人類史の転換点としてもてはやされていた，1万2000年前に始まった農耕の発明（農業革命）に対するそれまでの評価を，革命ではなく「史上最大の詐欺だった」と断罪したのだ。いわく，農耕によって単位面積当たりの生産量が増加し人口は急増したが，農耕時代の平均的な農耕民は，平均的な狩猟採集民よりもあくせく働かされ，食べ物も劣っていたというのである。

農業革命による人口増加により，人類は，個々人の不自由はともかく，種としては繁栄を手にした。その恩恵を持続させるために編み出したのが，階級制などの社会制度であり，宗教であり，哲学や科学だったという。ホモ・サピエンス（「賢い人」という意味）という字（あざな）は，その程度の意味ということなのか。しかし「賢人」の驕りは留まるところを知らず，今や，生命科学を操ることで不死と神性を手に入れる方向を目指しているという。これが，広範な話題が濃密に語られているハラリの新刊の書名『**ホモ・デウス――テクノロジーとサピエンスの未来**』（「デウス」とは「神」の意）の意味である。